

「岩栖門・含翠門」

岩栖門

有楽苑の荘厳な正門は、17世紀初頭に建てられた。他の門と同様、三井家の所有で、大磯別邸の庭にあったものである。その後、如庵とともに有楽苑に移築された。

この門の屋根は釣鐘状に湾曲しており、横から見ると最もよくわかる。このように屋根が湾曲している門を唐門というが、この門は屋根の中央の棟が進入方向に対して垂直である「平唐門」である。

この門の屋根は檜皮葺きで、船底天井と呼ばれる、板を凹状に曲げ、船を反転させたような形をしている。

含翠門

含翠門の年代や由来はほとんどわかっていないが、三井家の所有物であった。堀口は、この門の配置を決めるにあたり、絵巻物の縁取りのようなすっきりとした幾何学的なラインを生かし、内庭を額縁のように眺めることができるようにした。門をくぐると、石畳が整然と敷き詰められた長い道が続き、木々や苔が生い茂るトンネルを抜けると、その奥に書院の西側が顔を覗かせる。